

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580072

研究課題名(和文)聞き取り調査を活用した北欧バルト海地域諸語の統語的ゆれに関する微視的類型論研究

研究課題名(英文) Interview-based microcomparative and typological research on syntactic variations in Circum-Baltic languages

研究代表者

佐久間 淳一 (SAKUMA, JUN'ICHI)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：60260585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：フィンランド語の非定形節、アイスランド語の非人称構文、スウェーデン語の属性叙述文、リトアニア語の非人称文において観察される統語的なゆれについて、それぞれ現地で聞き取り調査とアンケート調査を行い、得られた結果を微視的類型論の観点から分析した結果、実際に統語的なゆれが観察されるが、そのゆれの実態は必ずしも先行研究等で報告された通りではないこと、また、統語的なゆれが生じる要因について、これまで指摘されてこなかった要因が関わっていることを明らかにすることができた。また、一連の研究によって、統語分析に微視的観点を導入することの利点、および聞き取り調査の有用性を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：As a result of the series of interview- and questionnaire-based microcomparative and typological studies on Finnish non-finite clauses, Icelandic impersonal constructions, Swedish predicative adjective sentence and Lithuanian impersonal sentences, the following have become clear: Syntactic variations observed in these studies are not the same as those reported in previous studies; Several unknown factors causing syntactic variations have been detected through the analyses from a microcomparative perspective; Both the validity of microcomparative perspective and the usefulness of interview-based research method are supported by these studies.

研究分野：言語学

キーワード：言語類型論 統語論 非人称構文 聞き取り調査 フィンランド語 アイスランド語 スウェーデン語
リトアニア語

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで、研究分担者、連携研究者、研究協力者と共に、バルト海周辺諸言語の対照研究に取り組んできたが、ただ多様な事象を対照するだけでは、個々の言語で観察される事象が、類型論的な一般化に当てはまるかどうか、といった一般的な話に終始してしまう。そこで、本研究では、統語的な「ゆれ」と考えられる事象に焦点を当て、その「ゆれ」の要因を考察することによって、当該事象をより深く理解し、当該事象に関わる理論言語学的な一般化に積極的に関与することを目指す。

近年、言語類型論では、microcomparative perspective(微視的観点)を導入した研究手法(微視的類型論)が注目を集めている。従来の手法が macrocomparative perspective(巨視的観点)に基づくものであるとすれば、それとは対照的に、この研究手法では、系統的に近い言語同士や同じ言語の方言同士を対照することによって統語的な多様性を見出すという方法をとる。

これまでの類型論研究は、系統や地域の異なる、なるべく多くの言語を対照させることで、統語事象に関する一般化を導き出そうとしてきたが、この方法は言語事実の羅列に陥りがちで、逆に、過度の一般化に陥ってしまう場合も少なくない。他方、微視的類型論では、基本的には同じ性質を持っているはずの言語同士を比較するため、何らかの相違点が見つかった場合、なぜそういう相違が生じたのか、確度の高い考察ができる利点がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次の三点にまとめることができる。

- (1) バルト海周辺地域の諸言語、諸方言間に見られる統語的な「ゆれ」を明らかにする。
- (2) それらの「ゆれ」のうち、普遍的な要因によって生じ得るものを明らかにする。
- (3) 上記(1)(2)を通じて、微視的類型論の有用性、およびネイティブスピーカーに対する聞き取り調査を中心とした研究手法の有効性を確かめる。

また、バルト海周辺諸言語は、微細に見れば複雑な分布をしており、他系統の言語の分布地域で、言語島のごとく存在している方言も少なくない。こうした方言も含めた記述は未だ十分でなく、ましてや、諸言語、諸方言間の対照によって見出される統語的な「ゆれ」が持つ意味を理論的に位置づけた研究はほとんどない。よって、本研究の意義は次の三点にまとめることができる。

- (1) これまでに記述のなかった統語的な「ゆれ」の同定を通じた記述レベルでの貢献。
- (2) 統語的な「ゆれ」が生じる普遍的な要因の考察を通じた理論面での貢献。
- (3) 新しい研究方法の実践と有用性の検証を通じた言語研究の実践面における貢献。

3. 研究の方法

本研究の方法論上の特色は、諸言語間の対照に microcomparative perspective を導入していることと共に、微視的観点からの考察を可能にするための研究手法として、ネイティブに対する徹底的な聞き取り調査を採用していることにある。

言語コーパスには、データソースのジャンルに偏りがあるという欠点があり、ある言語を大局的に観察する場合にはコーパスのデータが役に立つが、統語的な「ゆれ」のような、方向性を持った変異を考察する場合、コーパスは必ずしも有用ではない。また、母語話者の直感や、わずか数名のインフォーマントからの聞き取りに頼った研究も少なくないが、本来、変異の問題を取り扱うには、母語話者の言語意識を調査した上で、「ゆれ」の方向性について統計処理を行う必要がある。本研究では、聞き取り調査を中心に、質問紙による調査も組み合わせデータを集めることによって、従来の研究手法の欠点を克服し、客観的に検証可能なデータによる分析を行った。

4. 研究成果

研究代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者の研究成果は下記の通り。

佐久間淳一(研究代表者)

フィンランド語の非定形節における格表示の「ゆれ」を中心に分析した。なお、研究代表者は、2015年度と2016年度に研究科長の職にあつたため、実地の調査は、当時大学院博士課程後期課程の学生であった久保田 樹が行った。

実地調査は、フィンランドのトゥルクで2016年1月31日~2月6日と2016年10月29日~11月2日に行った。調査では、フィンランド語の分詞構文で、非定形節に主語相当句がない場合、主語以外の要素が属格で表示され得るかどうか、A不定詞基本形と受動現在分詞による修飾に関して、目的語の格表示が文法書の指摘通りかどうか、A不定詞基本形と受動現在分詞が他動詞でなく、関連する名詞がその目的語でないような非典型的な事例が容認されるかどうかを明らかにすることを目指した。

フィンランド語の分詞構文では、非定形節の主語が独立節における主格ではなく属格で表示されるが、非定形節が存在文や所有文だったり、結果構文だったり、不定人称受動文だったりすると、これらの文には主語が欠けているため、非定形節内の格表示は、独立節の時と変わらないはずである。しかし、これらの文は主格で表される要素を含んでいるため、それらが、分詞構文の非定形節では属格で表示される可能性がある。調査の結果、文の種類や非定形節内の位置等で異なるものの、文法的には許容されないはずの属格表示が一定程度容認されていることが明らか

になった。

一方、A 不定詞基本形の目的語は、先行研究によると、通常は 対格で表示され、主文の動詞とその目的語に相当する主名詞が結合して助動詞的に働く場合に限って n 対格で表示されるとされている。一方で、対格と n 対格の選択には「ゆれ」があることも指摘されてきた。他方、否定文における格選択に関しては、先行研究にほとんど言及がない。

調査の結果、目的語が 対格の文と n 対格の文の間には意味的な違いがあることが明らかになった。対格目的語が不特定の対象を表すのに対し、n 対格目的語は行為の完了を含意し、特定の対象を表すという違いがあり、実際、n 対格目的語には指示形容詞 *tämä* 「この」が付けられるのに対して、対格目的語には付けられない。

否定文における A 不定詞基本形の目的語の格表示に関しては、規範文法では主文の否定の影響を受けず 対格で表示されるとされているにもかかわらず、実際は、主名詞が主文の述語内にある場合は分格が選ばれることがわかった。また、主名詞が述語の場所格補部の場合は、対格か分格かで母語話者間にも「ゆれ」が観察された。また、否定の影響が及ばないはずの主語用法の A 不定詞基本形の目的語も、文頭でなく文末に置かれる場合は、否定の影響を受けて分格になることが明らかになった。

次に、主語と A 不定詞基本形・受動現在分詞が「動詞・目的語」の関係にない形容詞修飾文については、そもそもそうした表現が容認されるかどうか調査を行った結果、自動詞+場所格補部であっても、意味的に他動詞+目的語に準じて捉えられる場合には容認されること、また、自動詞+側置詞句であっても、動詞と側置詞が句動詞的なまとまりを形成する場合には容認されることが明らかになった。

入江浩司（研究分担者）

現代アイスランド語において統語的な「ゆれ」が観察される領域として、種々の非人称構文に着目し、研究を行った。言語データの収集方法としては、アイスランド語話者の協力による現地調査と、新聞記事を中心とする電子的コーパスを利用した調査を併用した。

平成 26 年度は、アイスランド語の非人称構文のうち、やや特殊な構造をもつ天候表現を中心に研究に取り組んだ。現地調査においては、アイスランド南西部に位置する首都レイキャヴィークと、北部の中心都市アークレイリで、話者の協力を得て聞き取り調査を行った。

rigna 「雨が降る」などのアイスランド語の天候の動詞は、指示対象を持つ項を一つもとらないことを特徴とし、平叙文で定動詞が二番目の要素となる語順の規則に合致させるため、この種の動詞を用いた文では文頭に虚辞代名詞を置くが、その虚辞代名詞に中性

単数形の *það* と男性単数形の *hann* の二つの選択可能性があり、どちらを用いても文の意味は変わらない。ただし、文頭に副詞などの成分が現れた場合には、中性単数代名詞 *það* は消え、男性単数代名詞 *hann* は保たれるという違いがある。比較的若い世代では、虚辞代名詞として男性単数形を使うことはないが、男性形を用いる話者では、中性形と男性形の統語的振る舞いが明確に異なっている。また、形容詞や名詞を述語とする天候表現もあり、やはり文頭に虚辞代名詞をとり、中性の虚辞代名詞はどの述語でも可能であるが、形容詞述語による表現では男性の虚辞代名詞が可能なものと不可能なものがあり、名詞述語による表現では中性の虚辞代名詞のみが可能であるということも明らかになった。なお、地域的な変異等の有無についての見通しを得るため、20 名ほどのアイスランド語母語話者を対象にアンケート調査も行なってみたが、その結果からは話者の属性と用法の「ゆれ」の間に確実な相関を見出すには至らなかった。研究成果は所属機関の紀要論文として発表した。

平成 27 年度は、いわゆる斜格主語をとる動詞の研究を中心に行なった。レイキャヴィークにて、(a) 対格主語をとるのが規範的とされる動詞 (*langa* 「～したい」など) と、(b) 与格主語をとるのが規範的とされる動詞 (*kólna* 「冷たい」など) について、主語の格の「ゆれ」に関する現地調査を行なった。

(a) のタイプで調査した約 30 個の動詞の半数では伝統的な対格が普通である一方、1/3 程度で対格も与格も同程度使われるか、むしろ与格の方がよく使われるという傾向であった。一方、(b) のタイプで調査した約 30 個の動詞では、1/3 程度は与格しか使わない、もしくは対格も可能であるが与格の方がよく使われるとされる一方、1/4 程度の動詞では対格の方が普通と感じられるようになってきているという結果が得られた。

平成 28 年度は、先行研究が提案する非人称構文の機能的分類に基づき、非人称のさまざまな機能がどのようにコード化されるかという観点からアイスランド語のデータを整理する作業を主として行なった。その結果、(a) 話題性のない主語と動詞が倒置する構文や、(b) 意思性のない主語を持つある種の構文において、主語と動詞の一致の有無に「ゆれ」があることがわかった。また、アイスランド語のデータは先行研究の提示する非人称領域の意味地図と合致しない部分があり、意味地図のさらなる検証が必要であることも明らかとなった。研究成果は所属大学の紀要論文として発表した。

當野能之（連携研究者）

スウェーデン語の非人称構文及び属性叙述文で主語名詞句と述語形容詞が一致を起さない場合を中心に分析した。

26-27 年度は、スウェーデン語における非

人称構文および虚辞に関する文献の比較検討およびコーパス調査を行った。具体的には、非人称構文としてコード化される事態にどのようなものがあるか、人称構文と非人称構文の両方でコード化される事態にはどのようなものがあるかについてまとめた。

現代スウェーデン語には、非人称構文として、天候表現のように、指示的ではない主語を持つ非人称構文、不定主語を持つ非人称構文、話題性のない主語を持つ非人称構文、無生物主語および意図性のない主語を持つ非人称構文が存在する。

では dummy subject である虚辞 'det' が用いられる。一方、では、ドイツ語の不定代名詞 man に相当する man を使うと大げさに聞こえてしまう傾向があり、säga 'say' を使った非人称受身を使う方が一般的であることがわかった。では、主語として新情報が入る場合、SV という通常の語順に加えて、虚辞 'det' が導入され、主語と動詞が倒置する語順がよく見られる。なお、に関しては、主語の有生性や意図性がコード化に影響を及ぼすことは無い。

以上のことから、スウェーデン語の非人称構文は、以下のようなコード化の方略を取る傾向にあると言える。

- 1) 指示的ではない主語：虚辞 'det' を主語とする文
- 2) 主語が不定：虚辞 'det' を用いた非人称受動
- 3) 主語が話題性を持たない：虚辞 'det' を用い、主語と動詞が倒置する

スウェーデン語（ノルウェー語、デンマーク語などでも見られる）の属性叙述文には、主語名詞句と述語形容詞句の間で性と数の一致が起らない 'Scandinavian pancake sentence' と言われる構文があり、これも一種の非人称構文とみなすことができる。28年度は、この構文の成立における主語名詞句の役割について、聞き取り調査をもとに考察した。

この構文は、主語名詞句の一般的な特徴を述べ、主語が非特定のであるという特徴がある。主語には、不可算名詞（あるいは mass reading）になる名詞句が現れる場合と、主語名詞句が行為を表す場合があり、特に後者について考察した。この場合、1) 行為を惹起しにくい名詞は 'Scandinavian pancake sentence' を形成しにくい、2) 所有の関係以外の場合には主語に制約がかかることが考えられ、この仮説をもとに聞き取り調査を行った。

その結果、行為の惹起性については、「スポーツ休暇」のような何をするかを惹起しやすい名詞句の方が良いとするネイティブスピーカーが多かった。次に、所有関係については、「スーツを着ること」のような一種の所有関係がみられる場合は主語に制約が見られないのに対し、「映画を見ること」のように所有関係以外を表す名詞句の場合、修飾句を付けると不自然であるとするネイティ

ブスピーカーが圧倒的だった。以上のことから、行為を表す主語による 'Scandinavian pancake sentence' は、所有関係を惹起する名詞句を取るものがプロトタイプであることがわかった。

櫻井映子（研究協力者）

リトアニア語の非人称文における統語的な「ゆれ」、特に目的語が主格で表示される事象を中心に分析した。

リトアニアを毎年訪問し、リトアニア語の非人称文における統語的な「ゆれ」に関して、ヴィリニウス大学バルト語学科の Jurgis Pakerys 准教授、リトアニア語学科の Axel Holvoet 教授、リトアニア研究学科の Ramutė Bingelienė 講師、東洋学科の Jurgita Polonskaitė 講師、ヴィータウタス・マグヌス大学人文学部長の Ineta Dabašinskienė 教授、文化民俗学科長の Laima Anglickienė 准教授らと議論し、多くのアドヴァイスを得た。さらに、諸方言のネイティブスピーカーに対する聞き取り調査を行った。その結果、リトアニア語高地東部方言に特徴的な、非人称文における主格目的語の問題を中心課題としてアンケートを作成することとし、事前アンケート調査を行った後、修正・変更を加えて本調査を行った。

主格目的語は、リトアニア語（および北部ロシア語方言やラトヴィア語方言）では歴史的に見て古い時代に特徴的な現象だが、現在でも方言によっては残っている。事前アンケートの結果から、標準語には非人称文における主格目的語が全く見られないことが明確となったため、本調査では、この現象が現在でも顕著に観察される、高地東部方言話者の多い、北東リトアニア地域に調査地を絞った。また、事前に想定した以上に幅広い世代の協力者が得られたため、本調査の回答者の年齢層を事前調査より拡大した。さらに、各世代間の違いを検討しつつ、どのような通時的変遷がどのような共時的分布として現れるかを調査した。

非人称動詞もしくは不定詞の目的語が対格（あるいは属格）ではなく主格をとる要因としては、特に次の三点が重要であると考えられる：1) 語順（目的語が非人称動詞もしくは不定詞に先行）、2) 強意性・トピック性、3) 人称制限・有生性(animacy)。

この現象については、より広範な地域的側面から、比較対照を進める必要がある。また、ラトヴィア語やロシア語との接触がもたらした影響と変化については、フィン諸語、バルト諸語、スラヴ諸語を視野に入れた、通時的側面からの考察も不可欠であろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計6件)

SAKUMA, JUN'ICHI. *On the Resultative Function of the So-called Reflexive Suffixes in Finnish*, Nagoya University Journal of the School of Letters, vol.13, 1-9. 2017. 査読有

入江浩司. 「現代アイスランド語の非人称構文の機能的分析」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』, 第9巻, 39-50. 2017. 査読無

當野能之、清水育男. 「『世界の言語シリーズ 12 スウェーデン語』語彙集」『IDUN 北欧研究』, 第22巻, 127-154. 2017. 査読有

SAKUMA, JUN'ICHI. *On the Reflexive Suffix and Its Predicative Function in Finnish*, Nagoya University Journal of the School of Letters, vol.12, 15-22. 2016. 査読有

SAKUMA JUN'ICHI. *On the Pseud-object in the Finnish language*, Nagoya University Journal of the School of Letters, vol.11, 19-27. 2015. 査読有

入江浩司. 「現代アイスランド語の天候表現」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』, 第7巻, 37-48. 2015. 査読無

〔学会発表〕(計4件)

佐久間淳二. 「フィンランドの再帰接辞と動詞の自他対応について」. 「通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり」研究会. 2016年7月31日. 札幌学院大学

櫻井映子. 「リトアニア語の再帰形態素による自動詞派生 自動詞からの自動詞派生を中心に」. 「通言語的観点から分析する逆使役化関連形態法の広がり」研究会. 2016年7月30日. 札幌学院大学

SAKUMA, JUN'ICHI. *On the Reflexive Suffix and Its Predicative Function in Finnish*. XII International Congress for Finno-Ugric Studies. 2015年8月17日~8月21日. オウル大学(フィンランド)

櫻井映子. 「リトアニア語の非人称文における統語的なゆれ」. 第3回バルト・スラヴコロキウム. 2015年4月4日. 東京大学

〔図書〕(計1件)

清水育男、ウルフ・ラーション、當野能之. 『世界の言語シリーズ 12 スウェーデン語』, 大阪大学出版会, 2016年

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等: 該当なし

6. 研究組織

(1)研究代表者
佐久間淳二 (SAKUMA JUN'ICHI)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 60260585

(2)研究分担者
入江浩司 (IRIE KOJI)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号: 40313621

(3)連携研究者
當野能之 (TOHNO TAKAYUKI)
大阪大学・外国語学部・講師
研究者番号: 50587855

(4)研究協力者
櫻井映子 (SAKURAI EIKO)
東京外国語大学・非常勤講師